

O.S.P.

OSPREY SPIRITUAL PERFORMER

Journal

オリキンスペシャル

無料

ご自由にお取りください

ブリとアフターが混在するフィールドで
持っておきたいアイテムはこれ!!
5月のオリキンボックス

オリキンが手掛けたカラー、
その真相を明かす。

折金一樹の カラー理論

いよいよ
登場。



第1弾は オリキン監修の オーバーリアル 63ウェイク

折金一樹という男。

The man, Kazuki Orikané.

なぜ、折金一樹だけが 釣れるのか…

オリキンのルーツに見る、人より釣るための秘訣。



OVER REAL 63 WAKE



Specification: 全長63mm・重量2.6g・全15色
(6月上旬発売予定・初期出荷は6色)
オリキンのこだわりが詰まったウェイクベイト。使い方はシンプルで、ピギナーからエキスパートまで納得の釣果をもたらしてくれる



3月上旬、また冬の様相を呈していたフィールドでの実釣では、たくさんのバスがオーバーリアル63ウェイクに興味を示した。見に来たバスをいかにバイトに持ち込むか。その駆け引きもオーバーリアル63ウェイクの醍醐味



オーバーリアル63ウェイク

～小粒のウェイクベイトに秘められた、折金一樹の理想。～

O V E R
R E A L
6 3
W A K E

O.S.Pが新たなブランドとして立ち上げた「O.S.P WORKS LOCO」の第一弾としてリリースするのが、折金一樹監修の“オーバーリアル63ウェイク”である。ここでは、全長63mmのウェイクベイトに秘められたコンセプトを、折金一樹が語る……



昨今のバス事情に的確に合わせた食わせに長けるトップウォーター

きつかけは、自分が必要と感じたことで着手。いわゆるウェイクベイト、トップウォータープラグで、まず最初にこだわったのが63mmというサイズ。日常的にバスがこのサイズのベイトフィッシュを追っていることが多く、年々激化するハイプレッシャーのせいも、常食しているエサとルアーのサイズが合っていないと食わないことが多い。かといってワームのノーシンカーなどを入れても甘噛みが多く、確実に「獲る」ことはできない。しかしプラグ特有のトリプルフックであれば、そんな甘噛みにも対処できる。つまり、食わせに長けるトップウォータープラグが欲しかった……

一般的なサイズのトップウォーターであれば、その存在感だけでもバスにアピールすることができる。しかし、63mmというサイズでは存在感が乏しいというのは、否定できない事実。ではサイズを大きくすればいいかというと、前述したベイトフィッシュとのサイズ感に合わなくなってしまう。そこで考えたのが「このサイズでいかにバスにアピールするか。これはウェイクベイトなので、ただ引くだけで水面に引き波を立てる。小刻みなロッドワークでは、ジョイントボディのメリットを最大限に生かして、左右にボディを振るような動きを見せる。こうしたアクションでバスにアピールし、サイズによる存在感の薄さを補った。

とは、引き波から生じる水のヨレや、小魚の尾やヒレに見立てた特殊繊維のリアルさで、バイトに持ち込むことができる。手前味噌だが本当に食わせに長けるトップウォーターであると言える。

厳寒期の真冬以外は出番があるセレクトティブなときほど効果大

では、どういうときにオーバーリアル63ウェイクは効くのか。はっきり申し上げると、春の訪れを感じはじめる3月からシーズンによっては11月くらいまで。特に水面でこのサイズのベイトフィッシュを追っているときや、バスが水面近くにいるときはぜひ使っていたきたい。

近年、よく耳にする「ワカサギバターン」にはうつつけ。瀕死の、もしくは産卵を終えてその生涯を閉じたワカサギが水面に浮いているときは、オーバーリアル63ウェイクの独壇場と言ってもいいだろう。

しかしそんなタイミングのバスは非常にセレクトティブ。少しでも違和感を与えるとそっぽを向いてしまうことも決して少なくない。人為的アクションを加えた瞬間、バスに見切られて苦汁をなめたアングラーも多いのでは？ そんなときはデッドスティッキングがおススメ。流れや風を受けて自然に動くジョイントボディと、特殊繊維の「ごく自然な動きでバイトに持ち込む」ことができるのだ。

オーソドックスな使い方はただ巻き

ときにトウイチチが効くことも

くり巻くことでジョイントボディのフロント部、つまりヘッドで水を受けて大きな引き波を生む。スピードについてはご自身の目で確かめてみればいいと思うのだが、スローからミディアムリトリブがちょうどいい。このスピードで巻くことのように泳ぐのかを、目で見て確かめて実践してもらいたいだろう。

このとき、気をつけたいのがルアーを泳がせるレンジ。ウェイクベイトであるため、基本的には水面に引き波を立てながら進むのだが、ロッドティップを高く保持することで、より水面をキープしやすくなる。当然、ティップを下げると引き波が出るか出ないかといった微妙なラインの水面直下を通してることができ。これはバスの反応を見ながら状況に応じて、試していくといい。

バスのレンジが深い、もしくは散っているときには、より見つけやすくするためにトウイチチでアピールする。決して大きく動かすのではなく、ロッドを「ちょんちょん」と小刻みにトウイチチするだけでいい。こうすることで、ルアーの位置から遠く離れたところでその存在に気づいたバスに対して、追いつかせる時間を与えることができる。ただ巻きでは出ないアクションでより気づかせるようにするなど、これもまた状況に応じて試してもらえばと思う。

もちろん、ただ巻きトウイチチもあり。広いエリアの中でただ巻きし、追ってきたバスが見えるのであれば止めたり（先述したデッドスティッキング）、トウイチチを加えるなどして食わせのスイッチを入れてやると、オーバーリアル63ウェイクで獲れるサカナの数は上がるだろう。状況によってはバスが追ってくる様や、バイトシーンも見れるだろう。使った楽しく、しかも釣れる。これまでトップウォーターでバスを手にしたことがない人や、プラグでバスを釣ってみたいというピギナーから、百戦錬磨のエキスパートまで、使い手を選ばず楽しんでもらえたらと思う。トップウォーターの新たな扉を開けるオーバーリアル63ウェイク。ぜひ、あなたのタックルボックスに忍ばせていただきたい。

ツチを加えるなどして食わせのスイッチを入れてやると、オーバーリアル63ウェイクで獲れるサカナの数は上がるだろう。状況によってはバスが追ってくる様や、バイトシーンも見れるだろう。使った楽しく、しかも釣れる。これまでトップウォーターでバスを手にしたことがない人や、プラグでバスを釣ってみたいというピギナーから、百戦錬磨のエキスパートまで、使い手を選ばず楽しんでもらえたらと思う。トップウォーターの新たな扉を開けるオーバーリアル63ウェイク。ぜひ、あなたのタックルボックスに忍ばせていただきたい。

ルーツに見る、 オリキンが釣れる理由。

ハードベイトオンリーのトーナメント、H-1グランプリと、印旛沼で開催されるNarita Airport Basser 21 (通称:NAB21)の2冠を昨年、奪取した折金一樹。腕に覚えのある強者が顔を揃える2つのトーナメントを制した、その強さの秘密はどこにあるのかを探る…

独自の理論で初バスをキャッチ 釣りの熱は冷めることがなかった

折金一樹(以下、オリキン)が釣りに出会ったのは、ごく自然な流れだった。父親はクロダイやサヨリ、アジなどの釣りをたしなんでおり、そんな父につれられて祖母が住んでいた木更津近辺の汽水の河川で、ハゼを釣ったのが最初だった。しかし、そのときは「釣っておもしろい!」という衝撃はなく、家族でレジャーの一環として行ったという思い出でしかないという。

釣りにのめり込んだのは、中学1年のとき。ふるくからバスフィッシングに興じていた幼馴染みがスピナーベイトをキャストしているのを見て「カッコいい!」と思ったのがきっかけ。そこから本格的にバス釣りにのめり込み、中学、高校の頃は自転車ですべて野池や高滝湖などに足しげく通ったという。

最初の1匹に出会ったのも、近所の野池。ゴロタ石がたくさん沈んでおり、シンカーのついたリグではすぐにスタックしてしまう。そこでファットギジットにスプリットショットを入れ、オフセットフックで使用。ロッドをあおるとクルクルとスパイラルフォールし、シンカーはボディ内にあるので引っかかることもない。この発想でファーストバスをキャッチしたのだ。今までバスを手にしたことがない釣り人が、この発想に行き着くとは不思議だ。逆に言うとその発想こそ、オリキンの今がある理由でもあるのだろう…



中学時代は野球部に所属。部活動が終わってから自転車で足繁く釣りに通った。その熱意は冷めることなく、高校から大学、そして今日に至ってもまだ、加熱を続けている

「なんで、光太郎だけ3匹釣ってこれるのか、不思議でしょうがなかった」とオリキンは、当時を振り返る。釣りはとても楽しくて、好きになる一方。そんな釣りで競う場に出て新たな楽しみを見つけ、より一層、釣りに心血を注いだ。「当時は起きている時間の9割8分、釣りのこと



はじめてのバスは39.5cm。チューブワームにスプリットショットを入れるという、バスフィッシング経験の浅い者が考え出したとは思えない発想で、見事にキャッチしてみた



ベントミノーにi-Waverの特殊繊維をつけるチューニングは、まもなく発売になるオーバーリアル63ウエイクの原型だったのかも…こうすればどうなるのかというドキドキが、結果的に人と差がつく釣果につながっているのかもしれない

を考えていました。今ですか? そのままでじゃないですよ」というほど。

ちなみに川村光太郎とは、いまもよき永遠のライバル。最も釣りがうまいと思う人は、とう問いに対して「やっぱり川村光太郎ですね」という答えが返ってきたほど。オリキンと川村光太郎は今後も、お互いを切磋琢磨する関係であり続けるだろう。



去年はH-1グランプリとNAB21の年間優勝を獲得。トーナメントの独特な緊張感はやみつき。今後もあらゆるトーナメントに出場を続けるという

どうなるのかというドキドキ これが結果的に釣果に結びつく

実はオリキンの中で、人より釣ってくるためにはどうすればいいか、という考えはそんなに強くなかった。まずは常識にとらわれないという考え。バス釣りは決してこうじゃなきゃダメということではなく、「こうしたらどうなるのかな」という興味で、いろいろなことを試す。「どうなるのか」というドキドキを楽しみ、それが結果的に、釣果として表れた。例えばフロロの3ポンドという細いラインが台頭しはじめたころ、オリキンはナイロンの2ポンドを導入。「伸びすぎて、ダメでした」とは言うものの、人と差がつく釣果に結びついた。「器用に見られるんですけど、決してそんなことはない。チューニングしたりルアーを自作したりしていますけど、釣れそうと思うことが大事。バス釣りにおいて、こうじゃなきゃダメということはないので、常識にとらわれないことが重要なんだと思います」

さらに、こう続けた。

「でも差をつけるには、ほかと同じじゃダメ。劇的な差をつけるには、すべてを超越して違うことをやるころからはじめなきゃ。トーナメントでも、大きなパイをたくさんのアングラーでシェアするより、パイは小さくても自分だけで独占できるほうが確実性はあるし、楽しめる。絶対というのがないから、トーナメントを含めてバス釣りは楽しいんだと思います」

バス釣りに出会って25年が過ぎた。それでもまだ、バスの本質の20%も知れていないとオリキンは言う。自分が知らない引き出しはまだまだ多く、ところ変われば品変わる。フィールドが変われば、バスの性格も変わるので、もっともっと経験を積みたい、とオリキン。今後はトーナメンターとして名を馳せるより、バスの本質の理



オリキン監修のハードプラグ、オーバーリアル63ウエイクがまもなくデビュー。詳しくは本誌別企画をご参照いただきたい

解度をもっと上げたい、というのが当面の目標だろう。とはいえ、トーナメント中の独特の緊張感味わい続けたいという。バスの本質を理解し、それがトーナメントで活かされたとき、オリキンが今以上の釣果を得ることは想像に難くない景色ではないだろう。

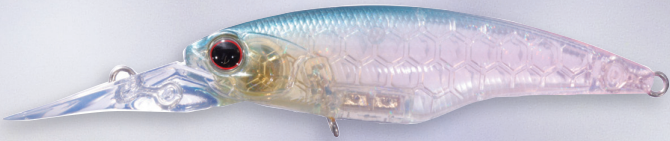


K.O.C.S.

- ラインナップ: O.S.Pジグ04シンクロ(SS09)・O.S.Pバズ02ビートJr. パビー(S59)・O.S.Pバズ02ビート(S59)・O.S.Pバズ02ビート ECO(S59)

水質もベイトフィッシュも問わない不思議な生命体。

いろんなルアーで昔からあるカラーパターンで、ボクのお気に入りのひとつ。何に似せているわけでもないですが、なぜか釣れる色ですね。水色もクリアからマuddyまで問わず、ちょうどいい存在感を醸し出しています。場所によってはエビにも小魚にもなり得る。一方でバスにとっては得体の知れない生命体で、思わず口を使ってしまうような、興味を惹くカラーであるとも感じています。



艶ワカサギ

- ラインナップ: アシュラO.S.P 925 SP・アシュラO.S.P SPEC2 925 SF・ハイクットSP・ベントミノー76・ベントミノー86-i-Waver74 F(PC87 ※カラー番号は共通)

ワカサギパターンでなくてはならない一色。

ワカサギパターンを釣るうえで、セレクトティブな状態になったバスのスイッチをどう入れるか。また見切らせず、スイッチが入ったままバイトに至らせるにはどうカラーを選択するのは重要なことです。そこでスイッチが入ったまま近づいて来るバスに、実態をカモフラージュするようなワカサギの強調色を、クリアのベースに盛り込んだのがこの色です。



スプイルワカサギ

- ラインナップ: ベントミノー76・ベントミノー86・ベントミノー106・アシュラO.S.P SPEC2 925 SF・i-Waver74 F(PH87 ※カラー番号は共通)

濁りの中でも映えるリアルさを追求したカラー。

通常は濁りが入った状況では、濁りに対して映える色を選択します。しかしワカサギパターンなどベイトフィッシュを強く意識するバスに対しては、濁りの中でありながら、本来のベイトフィッシュの色から遠ざげたくないという考えがありました。そこで、薄く透けるホワイトを基調にフラッシング要素も入れつつ、雨後の濁りがある状況では晴れてタフな場合も多いので、強すぎない存在感で小魚に寄せた色に設定しています。



インディゴワカサギ

- ラインナップ: アシュラO.S.P SPEC2 925 SF (PTS87)

クリアアップ+ローライトな状況下で見切らせない。

早春のクリアな水色やプランクトンが減って急にクリアアップしたような水色で、曇天、もしくは雨のときにほしかったカラーです。そんな状況下のバスは、ヤル気はあって追ってはくれるけれど、見切られてしまうことが多いと思います。クリアのベースに深みのあるブルーを乗せることで水色に馴染みつつ、反射板による弱いフラッシングは一瞬のバイトチャンスを生み出します。

シビアな状況下で選びたいオリキン印のカラーセレクト

折金一樹こだわりの

カラーコレクション

O.S.Pのルアーには、折金一樹が監修したカラーラインナップがあるのをご存じの方も多だろう。

水の色と光の量、さらにはバスの状態に合わせてシビアな使い分けが要求されるコンディション下で、ぜひ使っていただきたいカラーばかりだ。

このシールが目印!!



オリキン監修のカラーが施されたプラグには、このシールを貼っている。店頭で見かけたら、ぜひお手にとってオリキンのこだわりをご確認ください。



トリックシャッド

- ラインナップ: i-Waver74 SSS(PC84)

追ってきたあとUターンさせない絶妙な配色。

追ってはくもの見切られるような状況下では、直前で食わせる能力を上げることも大事ですが、バスが見つけたときの「見つけた感」を上げることもまた重要。そこで遠くからでもギリギリ見つけられるカラーの濃さで配色しました。さらにi-Waverでは食わせの武器となるテールに注視させるように、ジョイント後方は前方とテールの関連性をばかすような色味にしています。



サンセットワカサギ

- ラインナップ: i-Waver74 F-i-Waver74 SSS(PSE87)

太陽光と同じオレンジと水に馴染むグリーン。

経験的に太陽が低くなる時間帯、特に夕方は明らかに赤やオレンジを帯びた色が効くことが多々ありました。これは太陽の光の届き方によるものとの説もあるほどです。そこでフロントにはっきりとしたクリアの濃いオレンジを吹き、しかもオレンジの面積を調整するため、かつコントラストが出つつも水に馴染むようなクリアなグリーンをリアに配色しました。

5

月のオリキンボックス

おかつぱり

持ち歩けるタックルに限られるおかつぱり。あれもこれも、となってしまうのはできれば避けたい。そこでプリやアフターなど、さまざまな状態のバスが混在するこの時期の、オリキンおすすめのアイテムをご紹介します。5月のおかつぱりは、これだけあればOKだ!

アフター Spoon 用

ライブスティック

フォールの釣りに使用。サイズは3インチから4.5インチまで(高滝湖では6インチは大きすぎる、とはオリキン談)と、ドライブスティックファット4.5インチをチョイス。ノーシンカーのオフセット、バックスライドセッティングで縦にあるモノに対してオトしていく。比較的、地味な色がいいとのこと。

プリ Spoon 用

ドライブクローラー

サイズは4.5インチから9インチ。確実にボトムをとることができるウエイトを使うことがキモ。4.5インチ、5.5インチであれば0.9~1.3gが扱いやすいだろう。9インチの独特の波動は大型のメスに効くこともあるのでお試しいたきたい。動かし方について特に難しいことはなく、ボトムを切らずに一定のスピードでシェイクしながら引くだけでOK。ボトムの色になじみつつ、やや存在感を出すグリーンパンクベーパーやスカッパノンなどがオリキンのおすすめ。

O.S.Pジグ04シンクロ+ドライブクロー2インチ

スイミングで使用するのは、O.S.Pジグ04シンクロの1.2gか1.8gに、ドライブクロー2インチをトレーラーにセットしたもの。ロッドを上げた状態できおりカーブフォールを織りまぜながら、リールを巻いてスイミングさせる。アフターの個体が泳いでいるであろう水深(2~4m)をイメージしながら通してけるといい。



アフター回復(フィーディング)用

ベントミノ / オーバーリアル63ウェイク / マイラーミノ

5月中旬以降になると、早い段階でスポーニングを終えた個体も見えはじめる。産卵で失った体力を補うべくフィーディングしており、水面で果敢にベイトを追っているのであればベントミノの76もしくは86を投入。素早い動きで追わせて食わせる。たまにボイルをしつつ、水面を強く意識しているバスにはオーバーリアル63ウェイク。水面は意識しているものの、追ってまで食うようではない場合はマイラーミノのスローな攻め。このように、ここに挙げた3タイプは使うスピードと攻める範囲に応じて使い分けるといいだろう。

どのサカナを狙うのかによってルアーと攻め方をシビアに変えるオリキンのホームである高滝湖を前提としたとき、5月のフィールドにはプリとアフターのサカナが入り混じっており、後半になるとアフターから回復した個体まで出てくる。基本的にはスポーニングが前提となり、どのコンディションのサカナを狙うのかによって、使うルアーや攻め方が変わってくる。

例年、ゴールデンウィークにさしかかる4月下旬ごろからスポーニングがはじまり、ゴールデンウィーク明けでほぼ半分、5月下旬でおよそ8割のバスが産卵を終える。そんな中で、まずはプリスポーニングの個体であれば、スローな攻めが中心。産卵床(ベッド)を作る前のバスがうろろする水深3~4mをメインに探るといい。産卵を終えたアフターのバスはフォール、もしくはスイミングの釣り。フォールは橋脚や垂直護岸など、縦にあるモノに対して落としてくという釣り方。縦ストラクチャーに絡むゴミ溜まりなども見逃せない。スイミングは水深にして2~4mぐらいのレンジを泳がせるイメージだ。最後はアフターから回復してフィーディングに入っている個体。オイカワの産卵と相まって果敢にエサを追う個体も多く、ボイルシーンに遭遇することも少なくないだろう。

このように、狙うバスがいまどういう状態にあるのかに応じて、使うルアーと攻め方を的確に合わせていくことが最重要となるのだ。